

九、幼稚園教育の方法

第三、其の手段 (ついで)

三、手技、圖畫

一

幼兒の抑えきれない自發性が、そのままにあらはれて、聲調音律となり動作身振となると同じく、ものに托して之れをあらはすものが手技であり、圖畫である。勿論、何を型り、何を描くかは、その時々、影響に支配せられる。眼前にある實物が、寫生の手本となることもある。近頃見たものが、心像が浮び出で、手本となることもある。或は想像の所産が手本になつて居ることもある。すなはち、之等の手本の相違から別を立て、ゆけば、

寫生製作、記憶製作、想像製作の項目が列擧せられて、全然違つた性質に考へられる。而して、想像製作のみが自發的のもの、如くにも考へられて居る。成る程、之れも一面の理はそなへて居る。すなはち、その手本そのもの、性質からいへば、寫生製作の手本の如きは、最も客觀的に決定せられて居るものである。記憶製作の手本も之れに準ずるものである。

しかし、何故にそれが手本となつたか、一層進んでいへば、幼兒が何故にそれを手本として製作を始めたかといふことを考へる時は、皆ひとしく自發性が基になつて居るのである。すなはち、何

でもが勝手に手本となるものではない。撰ばるゝのである。而して、選擇の準據となるものは、一つに幼兒の感興である。而して、此の感興は純自發性のものである。

二

此の感興、即ち自發性を要素として考へて、始めて、幼兒の手法、圖畫を正當に理解することが出来るのである。従つて其の教育を正當ならしむめ得るのである。此の點に於て幼兒の手法圖畫は偉いなる藝術家の製作に最も近邇せるものである。少くも技巧の學習練習を主目的とする純課業的手工圖畫とは、此の點に於て區別せられて置くべきものである。

(い) すなはち一齊教授的に、一つの畫題を課する如きことは最も避けなければならない。もとより未だ自ら畫題を撰ぶことの出来ない様な幼兒に誘導的に之れを提供して、その自發を促すことは悪くないのみならず、時には必要のことである。

しかし、その場合と雖も、それを描かなければならないといふのではない。純粹の自發によるにせよ、誘導を俟つたものにせよ、兎に角く、撰擇といふことのないものは、幼兒教育の手段としての圖畫として意味のないものである。

(ろ) 況んや、論理的分解の結果による、學習的圖畫の順序として往々に行はるる簡單なる幾何學的圖形の練習の如きは、當然避くべきことである。但し之れも亦運動感覺練習といふ如き意味の興味のもとに行はるゝことは必ずしも斥くべきではないが、それよりも最必要に、最價值多きものは具體畫である。

(は) 描寫の技巧については、多くを期待する必要のないことは勿論である。殊に、形態、色彩、割合等の所謂靜的方面の正確精細は、到底嚴格なる期待をなし難い。蓋し、幼兒は、そのものを、そのものとして、靜的描寫を試みて居るのではなく、その動的方面を描かうとして居るのであるか

らである。例へば、犬を描寫せんとするのでなく、走る犬を描かうとして居るのである。植物學者の觀察の如き態度を以て花を描寫せんとするのでなく、其の美しく、愛らしく咲ける事を描かうとするものである。故に幼兒の畫に對しては、之れは何であるかと問ふよりは、之れは何がどうして居る處かと問ふべきものである。又此の意味の期待を以て、その指導を與ふべきものである。此のことは幼兒教育者の深く注意を要することであつて此の事實を忘れて、幼兒の圖畫の興味を正當に指導することは決して出來ない。幼兒は犬の走る事を描かうとして居るのに、犬そのものを描いて居るものと解釋せられ、又その如く要求され得ない幼兒は次第に圖畫の技巧の六かしさのみを覺えて其の感興は失せて仕舞ふのである。

以上の諸點は、手技に就ても同様である。たゞ手技に於ては其の材料からの支配が、單純なる感興へ、圖畫よりも一層發表の工夫を要求すること

が多くなるの違ひが多少あるのみである。故に、手技に於ては、或は豆細工、折紙、粘土細工といふ風に、その材料が主な位置を占め、遂には、その材料を使用して何を製作し得るかといふ様な傾向を生じて來るのであるが、材料は客にして、何を作らんかの撰擇が主なるべきものであることは、此の場合と雖も理論上變りはない。

三

但し、圖畫、手技が幼兒教育の範圍内としても音楽、動作遊戲等に比して、練習的性質を比較的多く有して居ることは事實である。必ずしも技巧の上達そのものを目的とするのでないとして、描出製作といふことが、既に、「出來得る限り巧に、正確に」といふことを含んで居るのである。是に於て、純粹の遊戯に比して、作業として區別せらるゝことも、敢て不當ではないのである。併し、作業としても、前述の「幼兒教育の手段としての」圖畫手技の本質は、どこ迄も第一としなければならぬ。